
ライス・ハザード

ロドリゲス 和司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライス・ハザード

【Nコード】

N0293I

【作者名】

ロドリゲス和司

【あらすじ】

新潟県で銘柄米消失事件が起こる。犯人は「R・ウィルス」に感染した人間「ライスヒューマン」だった。その後、ウィルスの感染は拡大していく・・・パンデミックの原因がクラスメートの星野の仕業であると考えた三年三組の生徒達は康太を中心として、「星野討伐隊」を結成する。

第1話：始まり

「俺のどこがおにぎりだ」

学校の帰り道、星野太希（以降、星野）はつぶやいていた。

星野は学校に行けば、おにぎりかお米と呼ばれる毎日にイライラしていた。

「他のやつ頭もおにぎりになればなあ」

そんなこと思ってもなるわけないのにふと口にしてしまった。

「そんなのありえないか」

「いや、お前のその願い叶えてやるよ」

うしろからその声を聞いたと同時に、星野の後頭部に強い衝撃が走り、そのまま倒れてしまった。そして謎の二人により星野は、気を失ったまま車の中に乗せられてしまった。

星野が誘拐された次の日、学校ではいつも通り普通に授業が進められていた。給食の時間に

三年三組の教室では、「笑っていいとも」を見ていた。担任の袴田が出張でいなかったのだ。

このとき足立和司（以降、和司）は、ちらつと時計を見た。十二時五十六分。

「もつじき終わりだな」

そんなことを考えながらテレビを見直すと、緊急速報のテロップが流れた。

「日本の銘柄米の産地の米蔵の米が何者かによって全て盗まれました。」

このとき、クラスのみんなは「なんだこれ」と思った。

すると、こうちゃんが

「この犯人星野だら」

と言つとみんな一斉に笑い出した。

「絶対星野じゃん」

「何やってんだあいつ」

リヨスケや亮太が言い出すとみんなさらに笑った。

だが森島康太（以降、康太）は星野の欠席とこの事件は裏で関係してるんじゃないかと、

真面目に考えていた。少し考えていると太箸宗磨（以降、宗磨）が

「康太君、ぼくっとしてるけど何か考えているの？」

「いや、ちよっとね」

と適当に答えた。その後

「そんなことあるわけないか」と一人で納得し、みんなと体育館に遊びに行った。

第2話：事件

その日のニュースではどの局も同じニュースが一斉に流れた。風呂上りの中村俊弥（以降、俊弥）は、コーヒー牛乳を飲みながらこのニュースを見ていた。

「誰がこのニュース見てるかな」ふとそんなことを思った俊弥は、連絡網で自分の次の和司にとりあえず電話してみた。

「おーい、和司、今何やってんだい？」

「なんだよ、いきなり。忙しい時に電話しやがって」

「忙しいといつてもゲームだろ。それより今やってるニュース見てみな」

「ニュースは録画してあるから別にいい」

「んだよつ、とりあえず見てみなって」

「わかった、わかった」

俊弥にしつこく言われたので和司はゲームの画面からニュースにチャンネルを変えた。ニュースには「謎の生命体出現」なかなかおもしろそうだ。だが、ニュースが終わるまで、謎の生命体の写真は流れなかった。そしてこの日、謎の生命体の写真や映像に現金百万円の懸賞金がかかった。

翌日、話の話題は全てこのニュースのことになった。当然、康太やリヨスケ、俊弥達もこのことについて話していた。だがこの生命体出現前と出現後では日本中で変わったことは、ほとんど無かった。こここの中学校でも同じであった。ただ一つ、宗磨と衛が学校に来なくなつた以外は。

この三日後新潟の農家の人が謎の生命体の写真を撮ることに成功し、この写真はすぐに日本中に公開された。謎の生命体は、体は人間のようだが頭が白く、三角の形をしていることからマスコミは「ライスヒューマン」と名付け、この一連の事件を「ライスハザード」と名付けた。この日からちょうど一週間後、日本に戦慄が走ることに

なる。

第3話：君が望んだこと

宗磨と衛が学校に来なくなった日、星野はようやく目を覚ました。

「ここはどこだ？」

まだ意識がすっかりしない。とりあえず立つて確認しようとする。初めて、体と足が鎖で縛られていることに気づいた。体全体に力を入れると後頭部が少し痛む。

「けっこー強く殴られたな」

手は自由に動かせるので頭を触るとたんこぶができていることに気づく。コツコツと誰かが近づいてきている。星野は足音に耳を澄ました。足音から判断して二人近づいてきていると星野は判断した。キィ〜と扉を開けて入ってくる。

「おはよう星野」

この声はどこかで聞いたことのある声だった。誰だ、思い出せ、よく考えると星野は自分に言い聞かせていた。

「もしかして宗磨と衛か」

「大当たり〜」

ふざけた声で衛が言うと

「ふざけんなよ、早く鎖を解け」

星野は怒りで声が震える。

「Oh〜怖い」

衛がまた挑発するかのように言うと

「もうよせ」

宗磨が止めに入る。そして、

「星野、君の願いが叶う時が来たんだ」

「何」

「これから新潟県のライスヒューマンは人間を襲い始める。襲われた人間はウイルスにより、ライスヒューマンになり、また人間を襲う。どうだ、素晴らしいだろ」

「ふざけんな！」

星野が言い返す。

「何故だ。君が望んだことだろ」星野は黙ることしかできなかった。「まあ、そこでゆっくり日本中の人間がおにぎり頭になるのを見ていてくれ」

そう言い残して二人は部屋に出た。その後、星野はずっと悔やみ続けた。それから一時間くらいたったのだろうか。

「うわ〜やめろ〜」

「ギャー」

突然二人の悲鳴が聞こえてきた。もしかして二人ともライスヒューマンに……

星野の背中に嫌な汗が流れた。次は自分だと考えると、血の気が引く。だが、こつちには何も来なかった。別のところへ行つたのだろう。星野は安堵の息を吐く。

「これからどうすればいいんだ」

星野は一人研究所に取り残されてしまった。

第4話：裏がある

宗磨の行った通り新潟のライスヒューマンはついに人間を襲い始めた。日に日に新潟のライスヒューマンの数は増えていき、ライスヒューマンの数が新潟の全人口の半分に当たる百二十万体を越えた時、ようやく政府が立ち上がった。内閣総理大臣の鳩山は新潟を完全封鎖し、残っている人々をまとめてミサイルで消し去る計画を立てた。そして、一日で新潟を完全封鎖し、鳩山直々にミサイルのボタンを押し、新潟全土を爆破した。そして、すぐに、全ての番組でニュースを流し、「ライス・ハザード」が終わったことを全国民に告げた。だが、日本各地に潜伏している恐れがあるので臨時国会で一時的に銃刀法を廃止することにした。

これでライス・ハザードは終わったはずなのに康太は一人考えていた。

「この事件まだ裏がありそうなんだよな〜」

この康太の考えは当たっていた。日本中のほとんどの人がライス・ハザードは終わったと思っていた。だが、ライスヒューマンのほとんどは生き残っていて日本各地に散らばっていた。このことを知っているのは、ある男達だけだった。

翌日、新潟に死体処理班が派遣され、多くのマスコミも新潟を訪れていた。だが、死体のほとんどは人間だった。このとき焼け野原に立っていた人々は

「奴等の死体はどこへ消えたんだ」

「ま、まさかライスヒューマンはまだ生きているのか」

不安の声が上がる。そしてこの日、日本中でライスヒューマンが確認され、また臨時国会を開くことになった。そして、翌日の午前九時に国外へ非難するよう放送を流すことを決意した。

「あゝ眠い」

学校に来てもみんなのまぶたは重かった。この日の学校は三年三組

のみんなはいつもと変わらないはずだった。袴田が教室に入ってきたときには星野、宗磨、衛、山本以外は席に着いていた。そして、いつもの様に朝の会が終わり、一時間目の英語の授業に入っていた。みんないつもの様にやる気が無い。

ツラの授業だからしょうがないか。八時五十八分、この時鳩山は既にマイクの前に立っていた。

このとき研究所で星野は一人考えていた。

「誰か助けに来てくれるだろうか」

冷静に考えて捕まえられてから二週間は経っている。そろそろ警察が見つ付けてくれるはずだ。そう思いながら星野は浅い眠りに就いた。

「あ、やべ」

和司は自分のひじで消しゴムを落としてしまった。それが転がって鈴木純（以降、純）の机の所までいってしまった。

「純君ちよっと消しゴム取って」

そう言おうとした時、ウウウウーと大音量のサイレンが鳴り、みんな耳をふさいだ。

「うっせ〜な〜」

クラスのみんなが口々に文句を言う。ま、俺としては授業が潰れてラッキーなんだけど。

そんなことを思っているとサイレンが鳴り止み放送が流れ始めた。

「国民の皆様、内閣総理大臣の鳩山です。皆様には聞いてもらわなければならぬことがあります。今、日本中にはどの国でも発見されていらない新種のウイルスが極めて少ない割合ではありますが空気中に混じっております。このウイルスは人体には大変有害なものであります。そこで国民の皆様には一週間後までに外国に移住していただく必要があります。パスポートは政府が用意してあります。また持ち物は必要最低限度な物以外は持ってこないでください。繰り返し

…」

この放送が終わる前にはもう教室が静まり返っていた。

「おい、それって一体どういうことだよ」

「ふざけんなよ、クソ鳩山」

みんな怒りと不安で声が震えている。そして日本を離れなければならないということがみんなをパニックにさせている。そんな中、校内放送が流れた。

「今あった放送の通りです。もう帰宅して下さい。以上」

放送が終わるとヅラは教室を出て行き、みんな帰る準備をし始めていた。

そのころ、国会では鳩山と数人の大臣が揉めていた。

「鳩山さん、あんたなんで嘘のことを言ったんだ」

「ライスヒューマンが生きることがばれたら俺の信用にかかわる。本当のことを言ったら支持率が下がるだろ」

「あんた国より自分のことの方が大事か」

「ああ、そうだ。お前らみたいにな下等生物と話すことは無い。俺は海外へ逃げる」

そう言つて鳩山は部屋から出て行った。残っていた大臣は呆れて言葉を失っていた。

「ウイルスなんてニュースでもラジオでも聞いたこと無いぞ」

女子の一部が帰り始めた中、康太は考えていた。

「これは嘘なんじゃないか。でも何故嘘をついたんだ」

分かりそうに分からない。そんな時、こうちゃんが呟いた。

「本当はライス・ハザードのせいじゃないか」

「そうか、それだ」

康太は大声を上げた。

「ありがとう、こうちゃん。おい男子聞いてくれ」

男子は全員康太の周りに集まった。そして康太は今回の放送が嘘であり、本当はライス・ハザードであることを伝えた。

「康太君それって本当？」

「ああ、多分間違いないと思う」

「みんなこれからどうする？」

純がそう尋ねるとみんな黙ってしまった。そんな沈黙を破ったのは康太だった。

「みんなとりあえず三日分の食料を持って夕方の五時にグラウンドに来てくれ。これからのことはそのときに考えよう」

みんな康太の意見に頷き、三年三組の教室を後にした。

あの放送は星野のいる研究所にも届いていた。

「なんだよ、それ」

怒鳴るように言ったはずなのに声に力が入らない。それもそのはず、捕まった日からなにも食べていないのだから。

「やべえ、死ぬ」

そう口にした直後、扉がゆっくりと開いた。顔を上げると、防護服で身を包んだ人間が食事を持って立っていた。体格からして男だろうと星野は考えた。その男は食事を星野の膝に置くと黙って部屋を出て行った。

「毒でも入ってるのか」

そう疑っても空腹には耐え切れずに、むさぼるようしておにぎりを三個食べた。

第5話：感染率5%

「五時まで後四時間か」

「昼食を食べ終えた和司は時間を確認していた。

「やっぱ、あれは買っておいた方が良いか」

そう言つて六本木ヒルズで拾ったクレジットカードを持って和司は自宅を出た。そうやって三年三組の男子は必要なものを集めていた。ただいま午後五時ちょうどをお知らせいたします」

こうちゃんの持つてきたラジオからそう流れた。そのときにはグラウンドの三年三組の男子は全員集まっていた。

「よし、全員いるな」

俊弥がそう言つと早速、康太は本題に移した。

「みんなはこれからどうするつもりでいるんだ」
それを聞くとみんなは黙ってしまった。まだ答えが出ていなかったのだ。その時、こうちゃんのラジオからとんでもないニュースが流れた。

「た、たつた今、外国への移住手続きを行っている現場にライスヒューマンが発生しました。現場からのレポートです」

「キヤー、イヤイヤ、来ないでー」

「ちよつと現場は大変なことになっているようです」

「これは、政府の責任ですね」

「そうですね、ここで新しい情報が入りました」

「どうしたんですか、早く言つてください」

「い、今入った情報によりますと、各国の大統領が日本人の移住を拒否し、空港、港を完全に封鎖するということを発表したようです。現場はすごい状況になっていた。

「それじゃあ、日本は鎖国状態じゃないか！」

高林幹弘（以降、幹弘）は声を荒げながら言つた。他の人は声を出すこともできなかつた。そんな時和司が

「一か八か自力で外国へみんな逃げよう」
「えっ」

みんな驚きのあまり聞き返してしまった。そして和司はもう一度
「自力で外国へ逃げよう」

「そんなの無理だつて」

野末健斗（以降、健斗）は力無く呟いた。

「いや、日本に今いても未来は無いし、いい考えだと思うよ」

後藤一将（以降、一将）は和司の意見に賛成だった。

「はあっ？逃げるにしたつて空港も港も封鎖されてんだぞ！一体どこへ逃げんだよ！」

純が一将に怒鳴った。その時、今まで黙っていた山崎尚人（以降、尚人）が

「そんなの簡単じゃん。空港や港以外から出ればいいだけだから」

みんなはそれを聞いて一斉に吹き出した。

「いいね、それ」

「それが一番良いよ」

みんな尚人の考えに賛成だった。反対していた純と健斗も難しく考えていたのが馬鹿馬鹿しく思ったのか、尚人の意見に賛同した。そんな和氣藹々している中で康太が口を開いた。

「みんな生き残って日本を脱出しようぜ」

「そんな当たり前だぜ」

幹弘がそう言うともみんなで円陣を組んだ。そして俊弥が

「いくぞー！」

「オオオ〜！」

そうしてみんなは誓いを交わした。「一人も欠けることなく日本を脱出する」と。この後みんな教室へ行き、これからのことについてついて話し合った。非常時だが楽しい一時だった。このとき、こうちゃんが星野の机を見ながら呟いた。

「そういや、星野がいなくなったのとライスヒューマンが出たのって同じくらいだよな」

その一言で教室に戦慄がはしった。そしてみんなお互いの顔を見合
わせた。

「もしかして最初にライスヒューマンになったのあいつなんじゃな
いか」

「その可能性は充分にあるな」

「何かのウイルスか突然変異ってやつか」

みんなが口々に言う。

「それだったら俺外国へ逃げるのやめるわ」

森田和磨（以降、和磨）が言うと、一瞬沈黙した。

「みんなで生きて日本を脱出するんだろ」

秋田佳享（以降、秋田）が和磨を止めようとするが、

「俺達も和磨の意見に賛成だ」

「うん、星野殺したら日本出るわ」

「ケジメはつけないと」

こうちゃん、リヨスケ、和司は和磨の隣に並んだ。

「じゃあ、国外逃亡準備班と星野討伐班の二つに分かれて行動する
のがいいだろ」

その康太の意見に全員が賛成した。そして話し合いの結果

星野討伐班・・・康太、こうちゃん、和司、リヨスケ、亮太、俊弥、
和磨

国外逃亡準備班・・・秋田、一将、純、鈴木高之（以降、高之）、
幹弘、健斗、尚人

になった。

> i 2 7 5 2 — 4 6 9 <

「あゝ今日は疲れたからもう寝るか」

亮太がそう言うともみんな自分の席で深い眠りに就いた。

この時、防護服を着た二人の男が目のあるモニターを見ていた。
モニターには日本地図が映っていた。モニターをみながら一人の男
が不適な笑みを浮かべた。

「Rウイルス感染率5%」
二人は顔を見合わせ笑った。

午前二時、高之は目を覚ましていた。だが寝ぼけていて再び眠りに就こうとしていた。コツコツコツ、コツコツと足音が聞こえてきた。足音はだんだん大きくなってくる。教室に入ってきた。まぶたが重くなっている顔を上げた。そして顔を確認する。見覚えのある顔だ。

「や、山・・・本」

高之はすぐに眠りに就いた。山本は別れを告げるようにして一人、一人の顔を見ると窓から飛び降りた。

第6話：出発

午前八時、国外逃亡準備班は学校を出発しようとしていた。

「じゃあな、気をつけるよ」

「分かっているって、お前らの方こそ気をつけるよ」

「ああ、次に会うときは十日後の浜松城で」

康太達は朝早く、どこで会うか計画を立てていた。そして、十日後の浜松城で合流し、中田島砂丘から海外に行こうとしていた。

「あ、渡すの忘れてた」

和司は自分のエナメルから拳銃を五丁取り出した。

「全員分無くてごめんな」

「いや、こんなところで手に入れたんだよ」

純が興奮しながら尋ねた。

「この前、銃刀法廃止されただろ。だから昨日グラウンドに集まる前に闇市で買ってきたんだよ」

「ありがとう、じゃあな」

秋田はそう言って車のアクセルを踏み込んだ。車がどんどん小さくなっていく。

「とりあえず、学校の中から使えそうなものもっていこうぜ」

そうして康太達は無人の学校をしらべていった。

康太達は武器になりそうな硫酸、塩酸、水素などが置いてある理科準備室へ向かうが和司は情報収集のため職員室へ向かった。和司は拳銃で職員室の扉を拳銃で壊し、パソコンを起動させた。

「なんかないかな」

インターネットでライス・ハザードのことについて検索していると、隅にあった記事へ目がいった。

「日本崩壊の原因はRウイルス」

クリックしてみたが記事は削除されているのかエラーだった。

「Rウイルスね」

一人で納得したように呟き、和司はパソコンの電源を切った。その間に康太達が必要になりそうな物は集め終わっていた。

「あのことはまだいいか」

康太達と合流してもさっきのことは言わなかった。こうして星野討伐班も学校を後にした。

「重い」

こうちゃんが苦しそうに言うと

「も〜休憩〜」

リヨスケは座り込んでしまった。

「車探そうよ」

亮太の意見にみんな賛成だった。康太と和磨が二人で車を探しに行くと、近くの運動公園に八人乗りのワンボックスカーが置いてあった。

「康太君、これはラッキーだね」

「うん、しかも鍵つけっぱなしだ」

急いで二人はこうちゃんの所へ戻り再び運動公園へ向かった。

「お、なかなかいいね」

「だろ」

和磨はテンション高めに答える。だが、俊弥は一人暗い顔していた。

「具合でも悪いのか」

亮太がそう聞くと、

「車を盗むのやめようぜ」

俊弥が言い終えると、和磨の右腕が俊弥の胸倉を掴んだ。

「ふざけんなよ、だいたい、後十日で星野を殺さなきゃいけないのにちんたら歩く気が、このでくのぼう。てか、鍵つけっぱなしにしてる自体盗んでくれて言ってるもんだろ」

和磨の怒りの説得により、全員車に乗り込んだ。

「コンビ二で何か盗んでいこうぜ」

リヨスケがそう言うと、和磨はセブイレブンに車を走らせた。セブイレブンに到着すると和司とこうちゃんはお菓子を全部盗もう

としたが、「必要最低限にしろ」とリヨスケに注意された。悲しげ表情を見せながらも、おにぎり、カロリーメイト、缶詰、水等のものだけを車に積み、セブンイレブンを後にした。

「これからどこ行く」

和磨がみんなに聞いた。

「そういえば、インターネットで検索していたら、Rウイルスってのが出てきたんだよ」

和司は答えた。

第7話：先は長い

「Rウイルス？」

俊弥が聞き返す。

「その記事はもう削除されてただけだし、ライスヒューマンとRウイルスは繋がってると思うんだよな」

ノートパソコンを開きながら和司は言う。

「じゃあさ、ライスヒューマンが最初に目撃された新潟に行こうぜ。そこにRウイルスの手がかりがあるかもしれないしさ」

亮太の意見にみんな賛成だった。

「どうやって行く」

和磨が聞いてくる。

「東名で名古屋まで行ってそこから中央自動車道でいけば、かなり早く着くと思うよ」

和司がすぐに答える。

「でも、武器は買っていかないと駄目だろ。和司の持つてる拳銃は二丁しかないんだぞ」

康太が指摘する。それもそうだと和磨は頷き、車を市街地へと走らせた。周りの車をどんどん抜かしている。ちよつと飛ばし過ぎだろとリヨスケは思いスピードメーターを確認した。

「90kmかよ」

スピードメーターは90kmを指していた。リヨスケはかなり驚いた。事故を起こすのではないかと思ったが、和磨は涼しい顔しながら運転している。車を進めるにつれて、抜かす車の台数が少なくなっている。

「危ないやつだな」

そう呟きながらみんなの顔を見ると表情が険しくなっていることに気づく。視線はみんな窓の外を向いている。

「市街地に近づいていっているのに、車の数が減っているね」

重い空気の中、亮太が口を開いた。

「浜松にもライスヒューマンの手が来たってわけか」

冷静な口調でこうちゃんが淡々と言った時、康太は前方に煙が上がっていることに気がついた。助手席に座っている康太は目を細めた。「事故か」

最後列に座る和司と亮太と俊弥が声を合わせて聞く。

「いや、違う。ライスヒューマンだ」

康太が言い終わると和司はエナメルバッグから拳銃を二丁取り出し、二列目に座っているリヨスケとこうちゃんに渡した。そして、二人は窓から上半身を乗り出しライスヒューマンに発砲した。撃たれたライスヒューマンは、その場に倒れたがすぐに起き上がり、車に向かってきた。こうちゃんは銃弾のことを考えて撃つのをやめたが、リヨスケは撃ち続けた。リヨスケに撃たれたライスヒューマンの中に一体だけ、赤い液体と種のような物が銃弾が貫通した部分から出てきた。それだけは、しばらく経っても起き上がらなかった。

「あれは一体なんだったんだ」
リヨスケが不思議がる。

「もう銃弾がほとんど無い。一旦闇市まで逃げよう」

亮太がそう言うと、和磨はアクセルを思いっきり踏み込んだ。

「どかねえとひき殺すぞ〜！」

和磨は大声を上げ、ライスヒューマンしかいない道路を疾走していった。

三十分ぐらい走ると康太達は暗い路地に入っていた。

「和司あとどれくらい？」

俊弥が聞いてくる。

「あとちょっと」

和司はクレジットカードを出しながらそう答えた。それから一分も経たない内に闇市に到着した。

「うわ〜いっぱいあるなあ」

そこにはいろいろな種類の武器が一つずつ並べられていた。

「これなんかカッコいいよ」

アサルトライフル「M16」を構える康太が目を輝かしている。各自、使いたい武器を手にとっていく。和司はスナイパーライフル「M24SWS」、こうちゃんは警棒、「AR-18」、和磨はメリケンサック、リヨスケはショットガン「モスバークM590」、俊弥は拳銃「ワルサーP99」、亮太は拳銃「ベレッタM92」を取り、皆試し撃ちを始めていた。試し撃ちを終えた康太達は勘定を払いレジに行った。

「俺が払いに行くからみんな車に戻っていいよ」

和司がそう言うのと、みんなライフルや拳銃をレジに置き車に戻って行った。

「合計で七十三万九千八〇〇円になります」

レジにいる商人がそう言うのと、和司は懐から拳銃を取り出し商人に銃口を向けて「代金はこれで勘弁してくれ」と言い、ためらい無く引き金を引いた。バンと乾いた銃声が空气中に響く。

「バイバイ」

そう言い残して和司は店を後にした。車に戻ると、もう出発してもいい状態になっていた。

「おせーぞ」

こうちゃんに注意され、すぐに車に乗り込んだ。

「もう午後四時か。行けるところまで行こう」

康太がみんなに言うのと和磨は車を走らせた。

少し走らせたところでリヨスケが口を開いた。

「ライスヒューマンから出てきた赤い液体って一体何だったんだろ
うな」

「ああ、あれか俺も考えていたけど、意味不明だよ」

俊弥がそう言うのと他の人はゴリラじゃわかんねーよと思い、声を出さずに笑った。

「でもあれだけは起き上がってこなかったな」

「なんか弱点って感じじゃね？」

こうちゃんと和磨も話に入ってくる。

「康太君はどう思う？」

亮太が聞くと、

「分かっているのは真ん中が弱点って事ぐらいかな。次に戦うときに調べようと考えているよ」

そんな会話を十分ぐらい続けると、静岡県から愛知県に入っていた。

「まだ愛知か先は長いな」

「そうだね」

と、またみんなで話し出す。そんな中、俊弥が苦しそうに

「和磨どつかで止まってくれ〜小便漏れそうなんだ」

と言う。声からしてこれはかなりやばそうだ。康太は近くに雑木林を見つけそこに止まるように和磨に指示を出した。

「漏れる、漏れる」

俊弥がすぐに車を出た。

「ちよつと待て」

和司が俊弥を呼んだが俊弥はそのまま行ってしまった。

「拳銃ぐらい持ってけよ」

文句を言う和司に、

「追いかけて行ってやれよ」

こうちゃんが言う。「面倒だな〜」と言いながらも和磨と一緒に俊弥の後を追った。

「あ〜死ぬかと思った」

俊弥が小便をしていると「キヤー」とすぐ近くから女性の悲鳴が聞こえてきた。俊弥はすぐに声の聞こえた方に視線を向ける。一瞬息が詰まった。そして声を震わせながら「ラ、ライスヒューマン」と言った。

女性の悲鳴は和司達にも届いていた。

「俊弥が危ない急ごう」

そう言っ二人は急いで俊弥の元へ向かった。

第8話：梅干（前書き）

今回から前書きではキャラ紹介したいと思います。

康太

頭脳：S 身体能力：A 武器：M16

特徴：星野討伐班を仕切るリーダー。見た目は爽やか中学生。冷静沈着であり、班員に的確な指示を出すことができる。仲間思いの性格。

第8話：梅干

俊弥はまだ動けないままだった。拳銃を持つてくるのを忘れ、助けたくても助けることが出来ない。そんな歯がゆい重いをしていると、ついに来てしまった。ライスヒューマンが女性を襲う。それとほぼ同時に和司と和磨が俊弥の元に駆けつけた。女性は喉元を噛み付かれ、その場に倒れてしまった。早く助けないとあの人が死ぬぞと思った和司は、俊弥に拳銃を二丁渡し、すぐに構えるように言った。その時、女性が急に立ち上がった。女性は顔中が白くなり頭の形が三角になっていった。三人は一瞬動くことさえできなかった。

「来るぞ」

和磨のその声で金縛りが解けた。和司は女性を襲ったライスヒューマンに向かっていた。すぐにライスヒューマンの懐に潜り込み頭の真ん中に向かって銃弾を打ち込む。ライスヒューマンは赤い液体を噴出しながら倒れた。まず一体。俊弥は和司が倒したのを見た後、もう一体に目をやる。

「い、いない」

和司の戦いに目を奪われていた俊弥はもう一体のライスヒューマンを見失っていた。

「どこだ」

俊弥は自分の大声で後ろの物音に気付かなかった。そしてライスヒューマンは俊弥に飛び掛ってきた。俊弥の目にはスローモーションで映っていた。人間死ぬときはこんな感じが、と思いながら襲ってくるライスヒューマンをじっと見続ける。

「俊弥！伏せろー！」

和磨の大声が耳に響いてくる。俊弥はさっと地面に伏せた。和磨は攻撃してくるライスヒューマンにカウンターの要領で顔面を殴った。

「なめんな」

メリケンサックを装備した和磨の拳はライスヒューマンの首から上

を粉碎するほどの威力だった。米粒が周囲に飛び散る。

「よかった〜」

二人から離れた場所から和司は安堵の息を吐く。和磨はライスヒューマンの死体から赤い物体を取り出していた。

「何だこれ」

俊弥と二人で臭いを嗅いだ。紫蘇の香りが鼻の奥までやってきた。

「梅干か」

和磨はそう言っ、俊弥と和司と一緒に車に戻っていった。

この時、一人の男がライスヒューマンの死体に立っていた。

「よくここまで成長したもんだ」

そう呟き男はその場を去った。

「遅い」

車で待っている四人のいらはピークに達していた。

「あのゴリラは何をやったんだ」

「いくらなんでも長すぎるだろ」

「星野殺す前に奴から殺すか」

各自文句を吐いている。

「和司も何しに付いて行ったんだよ」

こんな最悪のムードの中、和司達は車に戻ってきた。多少の遅れは許してもらえらと思っていた三人はこの空気に戸惑ってしまった。

「待ち過ぎて腰痛いな〜」

わざと聞こえるように言ってくる。

「ごめん、ごめん」

俊弥は大きい声で言っ、そのまま強引に車の座席に座り、和磨はすぐに車を進ませた。

重い雰囲気長く続き誰も口を開こうとしなかった。ここで和司はさっきあったことを言うことにした。ライスヒューマンに噛まれるとライスヒューマンになること、頭の真ん中にある梅干を潰すと死ぬことの二点を話した。この話を聞いてみんなはさらに静かになった。もう名古屋まで辿り着いてしまった。あと少しで長野、そこを

過ぎたら新潟まで行ってしまふ。そこで星野を・・・

星野のいる研究所では、謎の男二人がいた。二人はワインを片手にモニターを見ていた。

「感染率15%か」

「まあ、15%を超えると急に凶暴性が増すから、二日もあれば最低でも半分はライスヒューマンになるからな」

「でも例の計画は90%になったらやるんでしょ」

「ああ、その時が楽しみだな」

二人の不気味な笑い声はいつまでも響いていた。

時計の針は午後七時をちょうど指していた。

「今日はここらへんにしておくか」

康太がそう言うと、和磨は車を止め、他のみんなは車を降り野宿の準備を始めてた。車から少し離れたところに四方火を焚き、ライスヒューマン対策を取った。その後、おにぎりなどを食べ終え、明日の計画や準備をすることにした。

第9話：新潟前夜（前書き）

和司

頭脳：A 身体能力：B 武器：M24SSWS

特徴：兵器開発担当。主に裏方での活躍をする。武器を買う時にレジの人を容赦なく撃つなど、結構残忍な性格。

第9話：新潟前夜

星野討伐班が野宿の準備をしているとき、国外逃亡準備班はライスヒューマンと遭遇していた。

「不死身なのかこいつら」

幹弘がいらつかせながら言う。銃弾をいくら打ち込んでも倒せる気配が無い。

「みんなどけ」

後ろから秋田が車で突っ込んだ。ライスヒューマンもこれは効いたらしく、10m以上転がっていた。勝ったと全員が確信したとき、またライスヒューマンは立ち上がった。

「くそが！」

一将は高之の持っている拳銃を奪い乱射し始めた。全ての銃弾がライスヒューマンを貫いていく。それなのにライスヒューマンは何事も無かったように立っている。そしてこちらに向かって歩いてくる。「もうだめだ、死ぬ」

ほとんどがそう思っていた。ライスヒューマンとの距離がもう10mしかない。その時、純が飛び込んでいった。

「お、おい」

健斗の声も聞かずにまっすぐに突っ込んでいった。尚人はこのままじゃ危ないと思い、ライスヒューマンの足に狙撃した。これで体勢を崩したライスヒューマンに純は飛び掛かり、頭にある物を埋め込んだ。

「伏せろ！」

純が大声を上げたのと同時に強烈な爆風が襲ってきた。みんな吹き飛ばされていく。飛ばされる中、健斗はライスヒューマンの頭部が粉々になるのを確認した。

「痛って〜」

みんな飛ばされたところからそれぞれ声を上げる。

「ちょ、今の何だよ」

車の中から秋田が聞いてくる。

「あれ、手榴弾だよ。和司がくれた拳銃の中に混ぜたってさ、勝手にもらったの思い出して、使ったんだよ」

笑いながら純が答える。

「でも、あれだけやって一体しか倒せないんだら」

幹弘が真剣な顔で言う。

「まあ、次会ったら考えればいいら」

そう言っただけで尚人は車に乗り込み、他のみんなも笑いながら車に乗り込んだ。

「さっさと船盗みに行こうぜ」

純がそう言っただけで、秋田は慣れた手つきで車を走らせた。

「何作ってんの？」

歯磨きを終えた亮太が和司に尋ねた。

「これ、明日の為にさ、武器作ってんだよ。火炎瓶とか」

「俺も手伝っていい？」

「うん、ありがと助かるよ」

こうして二人は武器の開発をした。その間、康太とこうちゃんは明日の計画を考えていた。

「明日、朝早く行けば昼過ぎには新潟に行けるね」

「途中またコンビニ寄って行くか」

こうした話を続け、その後、全員で見張りを決めることにした。じやんけんの結果でこうちゃんとリヨスケがやることになった。一時までがリヨスケ、それ以降はこうちゃんがやることに決まった。そして、リヨスケ以外のみんなは相当疲れが溜まっていたらしく、すぐに寝てしまった。皆それぞれの想いを胸に秘めながら。

「きれいな夜空だな」

リヨスケはそう呟き、俊弥のかばんからおにぎりとお茶を取り出した。

「早く一時になんないかな」
そう言いながらおにぎりを食べ、空になったペットボトルを星に向
かって投げつけた。

第10話：暗闇に潜む白い影（前書き）

和磨

頭脳：B 身体能力：S 武器：メリケンサック

特徴：自動車の運転担当。野球部。持ち前の高い身体能力を生かし、接近戦を得意とする。右ストレートの威力はライスヒューマンの頭を粉々に破壊するほど。涼宮ハルヒが大好きなおたく。

第10話：暗闇に潜む白い影

「お、やっと一時か」

欠伸をしながら時計を確認したりヨスケは、こうちゃんを見張りの交代をするために起こしにいった。

「こうちゃん、起きてくれ」

必死になって起こしても起きる気配が無い。

「起きろ！」

こうちゃんの耳元で大声を叫ぶ。さすがのこうちゃんもこれには目を覚ました。

「もう一時か」

大きく伸びをするこうちゃん。それを見るとリヨスケは車内で倒れるようにして眠りに就いた。見張りとなったこうちゃんは車の上に移動した。

「眠」

欠伸をしながらこうちゃんは見張りを始めた。

見張りを始めて一時間、つい、うとうととしていた時、雑木林の方からウウウーと何か獣の唸り声がして目を覚ました。すぐに拳銃と警棒を構える。そして唸り声が聞こえた方向に懐中電灯を向ける。

「な、なんだあいつは」

そこにいたのは、頭が米粒だらけで目は血走り、歯茎が剥き出しになった毛の白いドーベルマンだった。一匹だけだと思っていたら、後ろから四匹ものドーベルマンが現れた。

「まじかよ」

すぐに先頭のドーベルマンの頭の真ん中を狙い銃弾を撃ち込む。

「よし」

梅干に命中し、早くも一匹を仕留めたが、他の四匹がいない。月明かりが差し込んでいる。この時、地面に映る影をこうちゃんは見逃さなかった。

「そこだ」

二発連続で打ち込むが、中々素早いため銃弾を外してしまった。この時を待っていたかのように一匹のドーベルマンが左から突っ込んできた。すぐに警棒で叩き落す。そしてドーベルマンとの距離をとるため後ろに下がる。

「ウウギヤア」

いきなり右からドーベルマンが襲い掛かってきた。これは避けることしかできず尻餅をついてしまった。とっさに警棒を杖代わりにし、一気に立ち上がる。そして車に飛び掛かってくるドーベルマンに向かって行くが、ひざから崩れて倒れてしまった。すぐに起き上がるうとするが力が入らない。だんだん意識も薄れていく。

「みんな」

そう呟き、車を見ると車のドアが開き、おにぎりが数個宙に舞う。そしておにぎりに紛れながら火炎瓶がドーベルマンの間に投げられた。すごい爆発がドーベルマン二匹を木っ端微塵に吹き飛ばした。こうちゃんは吹き飛ばされ木に背中を打ちつける。土煙が上る中、車から誰か出てきた。

「りよ、亮太」

火炎瓶を投げつけたのは亮太だった。すぐに亮太は残りのドーベルマンを探す。一匹のドーベルマンが亮太に飛び掛かる。これを楽にかわし、頭をためらいなく拳銃で撃ち抜く。こうちゃんを見つけた亮太は、すぐに駆け寄る。この時、亮太は背後から襲いかかってくるドーベルマンに気づかなかった。

「うわー」

亮太の絶体絶命のピンチ、こうちゃんは残りの力を振り絞り、引き金を引いた。銃弾がドーベルマンの右足に当たり、体勢を崩した。そして亮太は残りの銃弾を全て撃ち込みドーベルマンを殺した。辺りを見回すともう日が昇り始めていた。

「しんどー」

二人は顔を見合わせ、その場で深い眠りに就いた。

「ライスドッグの攻撃力は強いですな」

研究員の会話がコンクリートでできている部屋に響く。

「あと五十匹ずつ各都道府県に放してやれば、すぐに目標の感染率に達成するな」

「いよいよ、星野の野望実現だな」

第11話：非道（前書き）

こうちゃん

頭脳：C 身体能力：S 武器：特殊警棒、AR 18

特徴：康太を支える副リーダー。銃を持っているが、戦闘はほとんど特殊警棒を使って行う。太鼓の達人が上手い。

第11話：非道

翌日、一番早く目を覚ましたのは和磨だった。時刻五時三十分。和磨は毎朝の日課であるハレ晴れ（通称、ハルヒダンス）を踊るため、車を降りた。

「んー」

軽く伸びをし、周囲を見渡すところちゃんと亮太が倒れているのを発見した。

「おいつまじかよ」

急いで和磨は二人の脈を取った。よかつた生きている。和磨は車に戻りみんなを起こす。康太とリヨスケはすぐ起きたが、俊弥と和司は中々起きない。

「起きろ〜」

「あと十分だけ〜」

何を言っても起きてこない。和磨はメリケンサックを指にはめ始めた。

「ぶつ殺してやる！」

「ばかつ、車が壊れる」

リヨスケが止めに入っている間に康太が

「和磨がキレたぞ」

その言葉に二人は反応しようやく車から出てきた。

「亮太とこうちゃんが倒れているんだ」

康太は本題に戻し、全員二人の元へ駆け寄る。

「おい、大丈夫か」

リヨスケが話しかけても二人からの返事は来ない。

「とりあえず車に運ぼう」

康太の意見で二人を運んだ。リヨスケ達はラジオを聞きながら、朝食をとることにした。ラジオはいつもと変わらずライス・ハザードのことばかりだ。まだメディアは動いている。

「最新ニュースが入りました」

別にどうでもいいことだろと思いながら、和司はおにぎりを食べ続けた。

「人間を襲うライスヒューマンの仲間、ライズドッグのことについてお送りいたします。ライズドッグはとても凶暴で、人を見るとすぐに飛び掛かってくるということです。ニュースは以上です」

「おい、今の聞いたか」

俊弥が聞かなくてもいいようなことを聞いてきた。

「当たり前だろ」

リヨスケはおにぎりを食べながら答える。

「もしかして二人は昨日…」

和磨が洩らす。

「その可能性は十分にあると思うよ」

康太がそう言うどと気まずい空気になった。

パソコンを取りに車に戻った和司は、ある物を発見する。

「おにぎりか」

車の近くに落ちていたおにぎりを手に取る。食べられているというより、かじられていると言った方が正しいな。もし、ライズドッグが食べたとしたなら・・・和司は笑いながら車からパソコンを取り出し、おにぎりに硫酸を入れた。それを化学兵器の入っている箱にしまった。

朝食を食べ終えた康太達は出発のため車に乗り込んだ。車内で和司はパソコンでライズドッグの画像を探していた。ライスヒューマンに会うことなく、二時間くらい車を走らせたところで亮太とこうちやんは目を覚ました。

「大丈夫か」

リヨスケと俊弥が聞くと、二人は軽く頷き、「昨日はやばかったよ。」

と笑いながら言った。本当に大丈夫そうだ。

「二人は昨日何に襲われたんだ」

康太が真剣な顔で聞く。

「犬みてえな奴だよ」

こうちゃんが答える。

「やっぱりそうか」

和司はそう呟き、パソコンの画像を二人に見せる。

「これだろ」

返事は聞かなくてもわかった。二人の顔をみれば。

その後、こうちゃんと亮太の話を聞いてライスドッグにも梅干があることを知った。そしてセブンイレブンで食べ物を盗むことにした。和司と康太、リヨスケは車から降りてセブンイレブンに向かった。

自動ドアを破壊し、店内に入ると一人の男がいた。

「ここは俺の場所だ」

そう言いながら、銃をこちらに向けている。

「震えているぜ」

和司は全く銃に怯えていない。そして自分の銃を構えた。

「出て行かねえと撃つぞ」

そう言いながら後ずさっていく男。

「聞こえんなあ」

和司は銃の引き金を引いた。銃弾が男の持っている銃を弾いた。そのとたん、男は命乞いをし始めた。

「頼む、命だけはー」

「しょうがねええなあ」

和司がそう言うと、男に笑顔が戻った。それもつかの間

「助けてやらねえよ」

和司は容赦なくその男を撃った。銃弾が心臓を貫く。和司は仰向けに倒れた男を蹴り飛ばし、食べたいおにぎりを袋にいれ、店を出て行った。康太とリヨスケもおにぎりを袋に入れて店を出た。

「まさか、人殺したのか？」

車の中で俊弥が呟く。

「仕方ねえだろ」

和司が言い返す。

「そんなことより、もうすぐ新潟だ」

亮太の言葉で緊張が車内全体に走る。

「星野」

リヨスケが呟く。ついに新潟へ入っていった。この時、誰もあんなことが起こるなんて考えていなかった。

第12話：喰らう者（前書き）

俊弥

頭脳：D 身体能力：B 武器：ウルサーP99

特徴：力はあるが頭は弱い。よく和司にいじめれる、いわゆるいじられキャラ。頭脳、身体能力共に班員の中では最低ランク。お調子者であり優しい性格である。

第12話：喰らう者

新潟はミサイルの影響でほとんどが焼け野原になっていた。とりあえず魚沼市まで行くことにした。

「ひどいな」

ミサイルで死んだ人が地面に転がっていた。これも全て星野かと思うと怒りと憎しみがこみ上げてくる。それから走り続けると魚沼市に着いてしまった。だが何も見当たらない。

「手がかりなしか」

そう言いながら和磨は周囲を詮索し始める。

一体どれだけ探しただろう。もう日が落ちている。そんな時、

「何かあったぞ」

遠くの方に場違いな洋館を発見した。洋館の前まで行くと立て札が立てられていた。

「ライス研究館 危険注意」

この立て札により、さっきの生き残っていた住民の話が頭に残っていた。

「あそこは何やっていたか分からないけれど、一回大きな悲鳴が上がったんだよね」

何故悲鳴が上がるんだ。ま、行ってみれば分かる。それに星野がいるとしたらここしかないはず。

「さあ行くか」

車から降りたのは康太、和司、リヨスケ、俊弥の四人だった。亮太とこうちゃんも深夜の疲れのため、和磨と車に残ることになった。

俊弥が空を見上げる。晴れていたのに急に曇り始めてきた。それが洋館の雰囲気悪くしていた。

「嫌な感じだな」

そう洩らし、リヨスケ達の後ろについていった。目の前に立つとすごい不気味だ。康太はそう感じていた。ミサイルのせいで壁は焼き

焦げ、窓ガラスの大半は割れていた。康太がドアノブに手を回すとあっさりドアは開いた。中に入ってみると思った以上に汚くはなかった。多少、カビの臭いが鼻に付くが。和司の意見で二手に分かれることになり、和司と康太、リヨスケと俊弥に別れて搜索することにした。

和司と康太は、一階のリビングへ行つた。手がかりになりそうな物は何も無かったが、つい最近まで誰かが住んでいたような感じだ。二人はしばらく搜索した後、二階へ向かった。

リヨスケと俊弥は書斎を探していた。

「きつたね〜」

リヨスケが本をつまんでいた。本はシミと汚れで読めるものではなかった。リヨスケはずっと探し続けていた。その時、一瞬だが背筋が凍るほどの気配を天井から感じた。リヨスケはすぐに天井を見上げるが、何もいかなかった。俊弥もいなくなっていた。

「あのゴリラ」

本を床に叩きつけ、すぐに部屋を出て行った。

「あんなところ汚くて探せねえっての」

俊弥は書斎の隣にある衣装部屋の前に立っていた。

ドアを開けるとすぐ目の前に大きな影があつた。驚きと恐怖で声が出ない。そのまま尻餅をつくが、よく見ると鏡に映つた自分だった。

「おどかすなよ」

鏡に向かってそう言い部屋の中に入っていく。

「ここも汚えなあ〜」

そう洩らし、床に落ちている物をどかしながら前へ進む。

「ドスツ」

後ろから何かが落ちたような音がした。後ろを見ると俊弥は言葉を失った。そこにいたのは、頭はおにぎりそのもので目は無く、ひどくやせこけた人間のような姿、あばらは浮き出ている。そして異常な程爪は長く、爬虫類のような雰囲気を持つ生物だった。

この時、俊弥は恐怖とは別の感情を抱いていた。自分でも何か分か

らない。だが昔経験したことのある感情だった。

「何だよこいつ」

俊弥はすぐに銃を構え、謎の生物に向けて撃つが、素早すぎて当てることができない。部屋は狭く俊弥には不利な状況だった。

「くそっ」

こんな時に銃の弾が切れてしまう。すぐに新しい弾を詰め込む。だがこの隙を見逃してくれなかった。謎の生物が壁から飛び掛かってきた。紙一重で俊弥はかわす。爪にかすっただけで服が切り裂かれた。

「どこだ」

俊弥は謎の生物を見失ってしまう。前後左右を確認してもいない。

「そこか」

俊弥は天井を見上げた。謎の生物は天井に張り付いていた。

「いける」

俊弥はその時勝利を確信した。また飛び掛かってきた時、紙一重でかわし、梅干に銃弾を食らわせることができる。

「来い、来い」

この油断はすぐに死の恐怖へと変わった。謎の生物の口から自分の体長よりもはるかに長い舌を出してきた。その先端には入れ歯のような物がついている。

「やばい、避けなきゃ死ぬ」

頭はそう思っているが動くことができなかった。俊弥はこの時、謎の生物を見たときの感情が何なのか気が付いた。

いや、感情ではない。相手との圧倒的な力の差、何をしても縮まることのない才能の差、これだった。

「気づくのが遅かったな」

そうポツリと洩らし、逃げようとはしなかった。正面から死を迎いられようとしていた。

頭の中でみんなと過ごした思い出が蘇る。

まだみんなと遊んでいたかった、

まだみんなと話していたかった、
まだみんなと笑っていたかった、
俊弥の頬に一筋光る雫が流れた。

「みんなごめん」

俊弥から飛沫が上がる。紅い、紅い飛沫が。

俊弥の声はトイレにいたリヨスケにも聞こえていた。すぐにトイレを飛び出す。

「俊弥」

リヨスケは俊弥の声が聞こえた方に全速力で走った。衣装部屋の前に立つとリヨスケの右手にあった散弾銃が落ちた。

「嘘…だろ…」

リヨスケの目に映ったのは、俊弥の屍の上にいる謎の生物だった。すぐに二階に逃げようと全力で走った。恐怖のあまりそれしか頭になかった。だが、謎の生物は、階段の中腹に素早く移動しリヨスケの逃げ道を塞いだ。

「くそ」

力無くそう言い、リヨスケはキッチンへ逃げ込んだ。

第13話：リヨスケの危機（前書き）

リヨスケ

頭脳：C 身体能力：B 武器：モスバーグM590

特徴：食料管理担当。割としっかりとした性格。他の班員に比べて少し臆病な性格。頭脳、身体能力共に平均的な能力である。

第13話：リヨスケの危機

リヨスケがキッチンへ逃げ込んだとき、二階の研究室にいた和司と康太にも俊弥の声は届いていた。

「何かあったのか」

康太はリュックにしまっていたM16を取り出し、銃弾を装填するとすぐに部屋を飛び出し、一階へと向かっていった。和司は部屋を出ずに、机の引き出しの中に入っていた写真に目を奪われていた。写真には俊弥を殺した謎の生物が写っていた。

「なんだこいつ」

そう呟きながら写真の裏側を見る。裏側にはシミだらけだが、文字が書いてあった。

「イーター 危険要注意」

写真をポケットにしまい、康太の後を追った。

リヨスケは冷蔵庫の陰で震えていた。

「あいつが俊弥を……」

震えが止まらない。そして嫌な足音が聞こえてきた。心臓に直接響いてくる嫌な足音が。

リヨスケは近くに落ちていた鶏の骨を足音の聞こえてくる方に投げつけた。すぐに骨が碎ける音が聞こえてきた。足音はさらに大きくなってくる。こうなったら。

リヨスケはイーターの目の前に姿を現した。イーターはすぐにリヨスケの方を向く。そして襲い掛かってきた。リヨスケは冷蔵庫の扉を素早く開けた。イーターはそのまま突っ込み冷蔵庫の中へ入っていく。すぐに冷蔵庫の扉を閉め、近くにある棒を冷蔵庫の取っ手に挟みイーターを閉じ込めた。

急いでリヨスケはキッチンから飛び出し、出たとたんその場に座りこんでしまった。

「何なんだあいつは」

あまりの恐怖でもう立てそうになかった。

階段を下りてきた康太は座り込んでいるリヨスケを見つけた。

「リヨスケー」

すぐにリヨスケのもとに駆け寄る。

「大丈夫か」

「ああ」

軽く返事が返ってきた。

「俊弥はどうした」

康太が厳しい口調で聞いた。

「俊弥は…」

康太はそれ以上深く聞いてこなかった。

「一体どんなやつが襲ってきたんだ」

康太が聞いたと同時にキッチンから冷蔵庫の壊れる音が聞こえてきた。

「奴が来る」

リヨスケが震えた声で言った。

「二階へ逃げて！」

二人は全速力で階段へ逃げた。二人は軽く後ろを確認する。まだ来ていない。階段に辿りつき、キッチンを見るとイーターが出てきていた。

だが、イーターの様子がおかしい。

イーターはうめき声を発していた。すると徐々に体の色が肌色から赤色へと変わっていた。変色し終えたイーターはただでさえ速いスピードがさらに速くなっていた。

「来た」

二人は銃を構え狙い撃つが両方ともかすりさえしなかった。

「やばい」

康太がそう思った時、どこからかイーターの頭におにぎりが投げつけられた。イーターはおにぎりに気を取られた。

「今の内に早く」

和司の声だ。二人は急いで階段を登った。イーターはぶつけられたおにぎりを食べ終えるとまた二人を襲い始めた。二人は間一髪、和司のいる研究室に入ることができた。和司はすぐに扉を閉めた。

「大丈夫か？」

「ああ、和司のおかげで何とか」

イーターはすぐに扉の向こうまで来ていた。

イーターはすごい力で扉を押してきた。康太とリヨスケは和司に加勢した。それでも扉は少しずつ扉は開いてく。

「もう駄目だ」

リヨスケが弱音を吐く。だが、和司は異様に落ち着いていた。

「和司何か仕込んであるのか」

康太が聞いてきた。

「うん」

軽く返事を和司がしたところで急に扉を押す力が弱くなっていた。

「これは」

リヨスケが聞いてくる。

「硫酸入りおにぎりを投げた。硫酸は浴びれば火傷を起こすような劇薬だ。それならイーターにも効くと思っただ」

扉を開けながら和司が説明した。扉の外には、倒れているイーターがまだうめき声をあげていた。生きているものの、動けそうになかった。康太はイーターの頭に銃口を向け、引き金を引いた。撃たれた銃弾がイーターの梅干を貫く。イーターの動きは止まった。

その後、康太とリヨスケは黙って一回へ降りていった。二人の背中
は、イーターを倒してのに悲しみに溢れていた。

和司は研究室に残り、もう少し捜索を続けることにした。和司は大きい本棚に一冊しか入っていない本に目があった。手に取ると少しほこりが付いていたので軽く払った。

「ノートか」

そう呟き表紙をめくった。

第14話：日記（前書き）

亮太

頭脳：C 身体能力：A 武器：ベレッタM92

特徴：医療担当。（ちなみに医療知識はほとんどが康太からの受け売りである。）ライズドッグ四匹同時に相手にして勝利するほどの能力。身体能力はこうちゃん、和磨に劣るが銃の技術でカバーしている。

第14話：日記

「日記か」

表紙をめくってそうわかった。

「私は今日からある生物の研究を始める」

「ページ目にはそれしか書いていない。」

「書いているのは誰だ」

表紙に戻り確認するが何も書いていなかった。裏表紙も同じだった。最初の数ページは仲間の研究者の紹介が書かれているだけだった。

「つまんねえ」

目に留まるようなところは何も無いと思っていた。だが二十ページ目くらいに興味深い物が書かれていた。「二〇〇九年四月六日 私は仲間と共に新たな生命を造 あげた」

「くそつ、汚れで少ししか読めない」

文句を言いながら和司は読み続けた。

「四月十四日 私、の新たな生命 まず、ドーベルマン 注射 た」

「四月十五日 注 されたドー ルマン、普通 犬より凶暴であ つ。試し 生肉 与え とむさぼる様 食べて た。米の食いつ き 一番よ った」

「四月十日 日 あの犬、危険だ いうことで 毒 スで殺し。 死体、焼却処分 た」

「五月七日 次の実 台は死刑囚。ウイルスを注射 ると、悲鳴 が聞 えた すぐに聞こ なくなった。代わり 凶暴な唸り声 聞 こえ きた」

「五月八日 研 員の一人 噛まれ しまった。 噛 れた奴の姿 変わつてき。米、米とずっと叫んで る」

「五月十九日 ウ ルス 外へ漏れ。ここ もう終わり。次 実験場は浜 市立麩 中学校 古墳下」

「六月一日 次に実 を始 るのは十月 日 。ターゲットは、お
ぎりに一番近い 、星野太希」
和司の日記をめくる手が止まった。

「まじかよ」

和司は手に持っていた日記を落としてしまった。

「こんなに近くでやっていたなんて」

このころ、康太とリヨスケは俊弥の遺体のある衣装部屋の前に来て
いた。

「開けるぞ」

康太はM16を構えながらゆっくりと扉を開けた。部屋の中央には
ライスヒューマンになってしまった俊弥がいた。もうかつての面影
は無い。米、米と唸り声を上げながら近づいてきた。二人は銃を構
えながら後ろに下がっていく。

梅干を打ち抜けばいいだけなのに、二人は引き金を引けないでいた。
「どうしてこんな姿に……」

涙声で康太は洩らす。自分の手で仲間を殺すことができない。二人
の脳裏には俊弥との思い出が甦った。ついにリヨスケは手から銃を
落としてしまう。いや、捨てたに近い。そして下がるのをやめてし
まった。

「ごめん、俺のせいで」

一步、また一步近づいてくる俊弥にリヨスケはそう言って瞳を閉じ
た。リヨスケに飛び掛かる俊弥。康太はM16を構えるが引き金を
引けない。

だがリヨスケの目の前で俊弥の動きが止まった。まだ意思があるの
か。

「友の死を乗り越えるんだ」

康太は静かに息を吐き、銃口を俊弥に向けた。

「ごめん、許してくれ」

ゆっくり引き金を引いた。発砲された銃弾は梅干を貫いた。顔から

米粒が飛び散る。リヨスケが瞳を開けた時には俊弥は床に倒れ、亡き人になっていた。

膝をつく康太。いつからいたのだろう。和司は何も言わずに二人の間を通って、洋館の外へ出て行った。洋館の外では三人の心を見透かしたように雨が降り出していた。

第15話：友の死を乗り越えて

三人が車に戻ると車に残っていた亮太が異変に気が付いた。

「あれ、俊弥は」

三人は顔を見合わせ、康太が口を開いた。

「俊弥はイーターに噛まれてライスヒューマンになったから俺が殺した」

亮太と和磨、こうちゃんは言葉を失った。

「ごめん、俺がすっかりしていけば」

リヨスケが窓の外を見ながら独り言のように言った。誰もリヨスケを責めることはしなかった。車内は沈黙と悲しみに包まれていた。

「どこに行けばいいんだ」

運転席から和磨がみんなに聞いた。だが、誰も口を開こうとしない。そんな空気になっていた。

「洋館の研究室で日記を見つけた」

和司がそう言うと、みんな何も言わずに耳を傾けた。

「あの洋館でRウイルスの実験が行われていた」

一呼吸置いて和司は続けた。

「Rウイルスはあの洋館から漏れた。そして次の実験場は鹿玉中の古墳の下。ターゲットは星野」

和司は言い終え軽く息を吐く。自分達の中学校で実験を行っていた事実が全員が驚いた。

「そんな近くでやっていただけなのか」

みんな、和司が日記を見たときと同じ反応を見せた。

「じゃあ、さっさと浜松へ戻って星野を殺そうぜ」

和磨は急にスピードを出し始めた。

「もし、星野がライスヒューマンになっていなかったら？」

亮太の質問にみんな口を揃えて答えた。

「助けるに決まってんじゃない」

大きなモニターにはRウイルスの感染率が表示されていた「感染率75%」

「明日には確実に感染率90%を超えるな」

「ああ、究極のライスヒューマン、コメシスの誕生だ」

星野はベッドの上に固定されていた。

この時、車の中では、和磨が一人運転を続けていた。

「これで明日の午前三時には麓玉中に着くことができるな」

そのまま走り続けるとついに、麓玉中に着くことができた。午前二時四十八分。街はまだ暗闇に包まれていた。

古墳の前に集まる六人の星野討伐班。だが、まだ入り口が見つかっていない。必死になって探しても見つかる気配がしない。

「おにぎり〜」

そんな中、こうちゃんが叫ぶ。するとカチツと音がして入り口が現れた。

「おにぎりが暗号になっていたのか」

なんて緩いセキュリティだ。

「待ってる、星野！」

六人が研究所に入っていく。その直後、一人の男が現れ、研究所に入った。入った。

第16話：再会

六人が研究所に入ってきた時、実験が始まろうとしていた。
「うっ」

急にライトが光り星野は目を覚ました。その直後に謎の男が二人入ってきた。顔はよく分からない。

「コメシス計画を開始する」

モニターのRウイルス感染率は90%ちょうどだった。

「おい、やめろ」

必死に抵抗する星野。だが星野は右腕を掴まれた。

「Rウイルスを注射します」

二の腕に一瞬痛みを感じた。注射器の中の液体が自分の血管の中に入っていくのが見えた。

「これで俺は人間じゃなくなってしまったのか」

弱々しくそう呟く。それと同時に、星野は多くの足音が近づいているのに気が付いた。懐かしい声も聞こえてくる。

「お友達のようなだね」

男の一人が言った。

「星野」

研究室に入ってきた足音。俺を見捨ててはいなかったのか。

「よくここまでたどり着いた」

「うるせーな、星野返せや」

男の一人に和磨が言い返す。男の顔はわからなかった。

「非常に残念だ。君達のような才ある人間を殺さなければならぬとは」

男はそう言って白いスイッチを押した。天井から鉄の檻が下りてきた。檻の中にはライズドッグがいた。

「ただのライズドッグではない。ライオンの遺伝子を組み込んでより獰猛さを増したものだ。ここが君達の墓場だ」

二人はすぐに扉の向こうに消えていった。

「何体いやがるんだ」

ぱつと見では二十匹近くいた。二十匹もいては、六人ではとても太刀打ちできない。そして檻の扉が開きライズドッグが一斉に襲い掛かってきた。

「速い」

ライズドッグが檻から出たと思ったたらもう目の前にいる。なんて速さだ。殺されると思った瞬間、目の前のライズドッグが倒れていった。

「な、何があつた？」

ライズドッグを見ると梅干が貫かれている。一体、誰が助けてくれたんだ。全員、ライズドッグの死体が散らばるところに立つ男を見た。視線の先にはマシンガンを両手に持ち、いつもと変わらないポーカーフェイスで立つあの男がいた。

「や、山本」

緊急放送が流れた日から姿を消していた山本だった。みんなは山本のそばに行く。

「どこ行つてたんだ」

リヨスケが聞く。

「そんなことは後でいい。早く星野を」

あの大人しい山本が（山本は休み時間常に一人で読書をしていた。）とみんな思いながら固定されている星野を解放した。

「みんな」

星野が笑みを浮かべる。だが亮太は銃口を星野に向けた。

「おい、星野。お前すでにRウイルスに感染しているんだろ。さっさと死ね」

みんな驚きで動くことすらできなかった。その時、山本の手が亮太の銃を包む。

「星野を殺すのはここを出てからでもいいだろ」

亮太は銃を降ろしたが星野を睨みつけた。

「早く出るぞ」

そう山本が言うのと和磨と康太を先頭に出口を目指し歩いた。

この時星野はある疑念を抱いていた。みんなは自分を助ける為に来たのではない。自分を殺しに来たのだ。このまま一緒にいては確実に殺される。隙を見て逃げなくては。

しばらく通路を歩いてしていると突然、排気口の金網が外れた。全員が排気口を見る。だがしばらくしても何も出てこない。

「あせらせやがって」

和磨がそう言うのと全員再び、歩き始めた。すぐに何かが排気口から現れた。だが誰もその存在には気が付かなかった。イーターがいるということには。

気配を殺したイーターは天井を移動し、康太達との距離を縮めていった。気配を殺している為誰も気が付かない。そして音も無く舌を伸ばし、山本の首に巻きつけた。山本は何か又メットとした何かが自分の首に巻きついたのに気が付いた。だが気が付いたところにはもう遅く、イーターの方に引き寄せられていった。

誰も山本がいなくなったことに気が付かずに、そのまま通路を歩いていった。

山本は抵抗するが次第に力が抜けていった。

「み…みん…な…」

舌を握っていた両手がだらりと下がる。イーターは山本の死体をばらばらに食いちぎり、むさぼるようにして食べた。そして食べ終えると康太達の後を追った。山本は仲間のピンチを救い一人、この世を去っていった。

康太達は出口まで50m程のところまで来ていた。壁がコンクリートからガラスに変わった。和司はふと横を見た。ガラスには自分と仲間達の姿が映っていた。何かがおかしい。一人足りない。山本がない。ここで和司は山本がないことに初めて気が付いた。すぐに後ろを振り返った。和司の眼には窮地を救ってくれた山本の姿は無く、俊弥を殺したイーターの姿が映っていた。イーターの体には

血が付いている。まさか、山本は死んだ・・・やばい、逃げないと死ぬ。

「みんな、走れ！」

和司は叫んだ。

「おい、急にどうしたんだよ」

リヨスケが言う。

「イーターだ！イーターがすぐ後ろにいる！」

その声に全員が後ろを振り向く。イーターは天井に張り付き、舌をチロチロ出して獲物を狙っている。全員走り出した。それと同時にイーターも動き始めた。

第17話：脱出

「おい、みんなもつとばせ！」

走りながら和司が大声で叫ぶ。イーターは移動速度を上げてこつちに向ってくる。亮太はバツグからベレッタM92を取り出し、イーターに向けて発砲するが、走りながらのため狙いが定まらない。

「この先はT字路だ。二手に分かれるぞ」

康太がそう言くと、全員こくりと頷き分かれた。左の道には康太、こうちゃん、亮太が、右の道には和司、リヨスケ、和磨、星野と分かれた。イーターは右の道へ進んだ。

「おい、こつちかよ」

和磨が言った。そのまま走っていくと広い部屋に出た。部屋には大きなモニターとたくさんの機械があった。モニターには「感染率90%」と映っていた。道理でラジオからニュースが流れなくなっていたのか。

「ここで戦うしかない」

リヨスケはモスバーグM590、和司はM24SWSを構え、和磨は指にメリケンサックをはめた。星野は機械の陰でその様子を見続ける。

「本来、狙撃用なんだがこの状況じゃ仕方ないか」

和司は通路を走っているイーターに銃口を向けた。そしてイーターは部屋に入ってきた。

「これでも食らえ」

和司はスコープを覗き、引き金を引く。しかし銃弾が出てこない。「あれっ？」

何度も引き金を引くが銃弾は出てこない。イーターは舌を伸ばしてきた。その直後、和司の視界からイーターはいなくなった。横を見るとリヨスケが引き金を引いていた。リヨスケの撃った散弾は和司に当たることなく、イーターに当たり、和司はなんとか助かった。

「大丈夫か？」

リヨスケが心配した。

「ああ、おかげで何とか」

和司は答えた。イーターが体勢を立て直してきた。

「和司、硫酸入りおにぎりは？」

リヨスケが聞いた。

「悪いが無い。おまけに俺のM24SWSは故障だか何だか知らないが、動かない」

くそっ、こんな時に。おまけに室内では火炎瓶も使えなかった。

「来るぞ」

和磨はそう言った。イーターはリヨスケに襲い掛かる。リヨスケは引き金を引き、至近距離で散弾をイーターに当てた。空中でイーターはバランスを崩し、床に落ちる。イーターの後ろにあるスクリーンの液晶画面が割れた。倒れたイーターの顔面目掛けて和磨は殴った。イーターはそのまま、壁に強くぶつかかり、うめき声を上げる。リヨスケは間髪入れずに、イーターに向けて計四発の散弾を浴びせた。

「死ね、死ね、死ね、死ね」

撃った散弾がイーターの体に当たる。

「これで、しばらくは立ち上がれないな」

リヨスケは安心した。もう銃弾の残りは無かった。複数の足音が聞こえてくる。

「大丈夫か」

康太達が息切れを起こしながら聞いた。

「何とかね。でも銃弾は全て使い切った」

「それはこっちもさ」

見ると、みんな疲れきっている。

「早くここから出よう」

康太がそう言うと、みんな歩いて部屋を出て行った。

星野は部屋から出ずに機械の陰に隠れたままだった。そして、ある

スイッチを見つけてしまった。

「緊急脱出装置」

星野は一人で考えた。このまま出るとみんなに殺される。でも、これどこに脱出するかわからない。

「どうしよう。」

星野の頭にはみんなと過ごした日々が思い出された。

「やい、くそ星野、本当におにぎりだな」

「万年補欠プレイヤー」

「おい、またシカトか星野」

「死ぬ死ぬ死ぬ死ねくそおにぎり」

「何で生きてんだよ。早く死ね」

そうだみんなに殺されるのは決まっている。ならば少しの可能性に賭けよう。

星野がスイッチを押すと、横の壁が突然開いた。奥を覗くとそこにはロケットがあつた。星野はすぐに乗り込み、発射スイッチを強く押した。

「何でこんなに心が寒いんだろう」

そう呟くとロケットは研究所から発射された。

第18話：希望

薄暗い通路に明るい光が差し込む。

「もうすぐ出口だ」

亮太が声を上げると、みんなに笑顔がこぼれる。先頭にいる和磨が階段に一步踏み出した時、後ろから風を切る音が聞こえてきた。

「誰だ」

みんな目を凝らし通路の奥を見続ける。

「イーターか」

こうちゃんがそう言う。そこにはさっき倒したはずのイーターが傷だらけの姿でいた。やはり、梅干を貫かない限り復活するのか。すぐに、みんな全速力で階段を登り始めた。

「たくさんいすぎだろ」

傷だらけのイーターのすぐ後ろに、数匹のイーターがいた。もう、銃弾は残ってない上、あんなのと戦う体力は残っていない。和司はバグからビンを取り出し床に叩きつけた。バリンとビンの割れる音が通路に響く。イーターはこっちに走ってきた。

先頭の和磨は研究所を出る直前だったが、最後尾の和司の後ろにはイーターが来ている。

「みんな飛び出したら伏せろ！」

和司が叫び、自分の後ろに火炎瓶を投げつけた。その瞬間激しい炎と爆風がイーターを呑み込んだ。爆発により、和司の前にいる亮太とリヨスケはテニスコートまで吹き飛ばされた。

「痛つてえ〜」

テニスコートで和司が頭を押さえる。すぐにこうちゃん達が駆けつけた。

「今の爆発は何だ？ただの火炎瓶にしては爆発が大きすぎるぞ」
康太が聞いた。

「水素だよ。最初に水素を充満させて引火させたんだ」

和司が答える。

「そうか、いずれにしる全て終わったな」

こうちゃんがそう言うと、みんな爆発で崩れた研究所の入り口を見続けていた。

その時、亮太の携帯が鳴った。

「もしもし、おつ純」

それは純からの電話だった。

「国外に行く準備が出来た」

小さな歓声上がる。

「よし、行こう」

和磨の声を合図にみんな車に乗り込んだ。

「よし、浜松城目指していくか」

リヨスケがそう言うと、和磨はアクセルを踏み込んだ。

星野はいない。だが誰もそのことは口にしなかった。

「夜明けだ」

和司が呟く。みんな東の空を見つめる。真っ直ぐな光が散らばって、僕達の心に束になって降り注ぐ。やっと手に入れた希望。もう放したりしない。

その五日後、星野はタイに流れ着いていた。発射されたロケットが途中で海に墜落したのだ。海に落ちる前に星野はロケットから脱出したから助かった。だが星野は自分がどこに流れ着いたのか分かっていなかった。なんであんな博打のようなことをしたのだろう。まあ、いい。命は無事だ。

「腹、減った」

よろよろした足取りで星野は立ち上がった。向こうに何か明かりがある。星野は明かりのある方へ向った。明かりの正体は小さな料理店だった。料理店の前に着いた。米が欲しい、米が。ドアノブに手を掛けた時、星野の体に異変が起きた。体中が熱いし、頭が痛む。

そして・・・

注射の跡から米粒が溢れ出してきた。

第18話：希望（後書き）

第一部完結です。第二部は三月頃連載開始予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293i/>

ライス・ハザード

2010年10月23日14時12分発行